

この秋、想田観察映画 × 平田演劇が面白い! 想田和弘監督『演劇1』『演劇2』関連情報

●『演劇1』『演劇2』釜山国際映画祭にてワールドプレミア上映決定!!

●想田和弘著『演劇vs.映画—ドキュメンタリーは「虚構」を映せるか』(岩波書店)10月19日◎発売

虚と実が入り乱れる映画『演劇』。その舞台裏を想田監督自ら赤裸々に綴ることで開かれた、ドキュメンタリー論の新地平。平田オリザ、劇団青年団の俳優・スタッフ、岡田利規、ライムスター宇多丸ら、豪華メンバーとの対話も掲載。四六判・並製カバー 232頁 定価1,995円



●前作『Peace』DVD販売中(紀伊國屋書店・3,990円)

ライムスター 宇多丸と想田和弘監督の撮り下ろし対談など特典映像135分を収録

●スカパー!でも想田和弘監督特集

10月～11月シアター・テレビジョン(スカパー!)、想田監督の劇場未公開作品である『ザ・フリッカー』『ニューヨークの夜』をはじめ『選挙』ほか計5作品、独占インタビュー、平田オリザ舞台作品など一挙放送! 詳細はシアターテレビジョンHPまで。

平田オリザ・青年団 関連情報

●平田オリザ著『わかりあえないことから』(講談社現代新書)10月20日◎発売

●平田オリザ初の小説『幕が上がる』(講談社)11月9日◎発売

●第69回公演 アンドロイド版『三人姉妹』

青年団+大阪大学ロボット演劇プロジェクト 10月20日(土)から11月4日(日) / 場所: 吉祥寺シアター
原作: アントン・チェーホフ / 作・演出: 平田オリザ / テクニカルアドバイザー: 石黒浩(大阪大学&ATR石黒浩特別研究室)
出演: アンドロイド「ジェミノイドF」 ロボビーR3 山内健司 松田弘子 大塚 洋 能島瑞穂 石橋亜希子
井上三奈子 大竹 直 河村竜也 堀 夏子 アンドロイドの動き・声: 井上三奈子
※10月21日(日)15:00～の回、アフタートークに想田和弘監督が登場/お問い合わせ 青年団 03-3469-9107

●第70回公演『サンタクロース会議』 作・演出: 平田オリザ

【飯能公演】2012年12月8日(土) 飯能市市民会館
【東京公演】2012年12月14日(金)～23日(日) こまばアゴラ劇場



演劇1 演劇2 ※『演劇1』と『演劇2』は、どちらの作品からご覧になってもお楽しみ頂くことができます。

10月20日(土)～11月23日(金), 5週間限定上映

10月20日(土)～11月9日(金)まで、前半3週間＝
12:45～『演劇1』/16:00～『演劇2』/19:30～『演劇1』

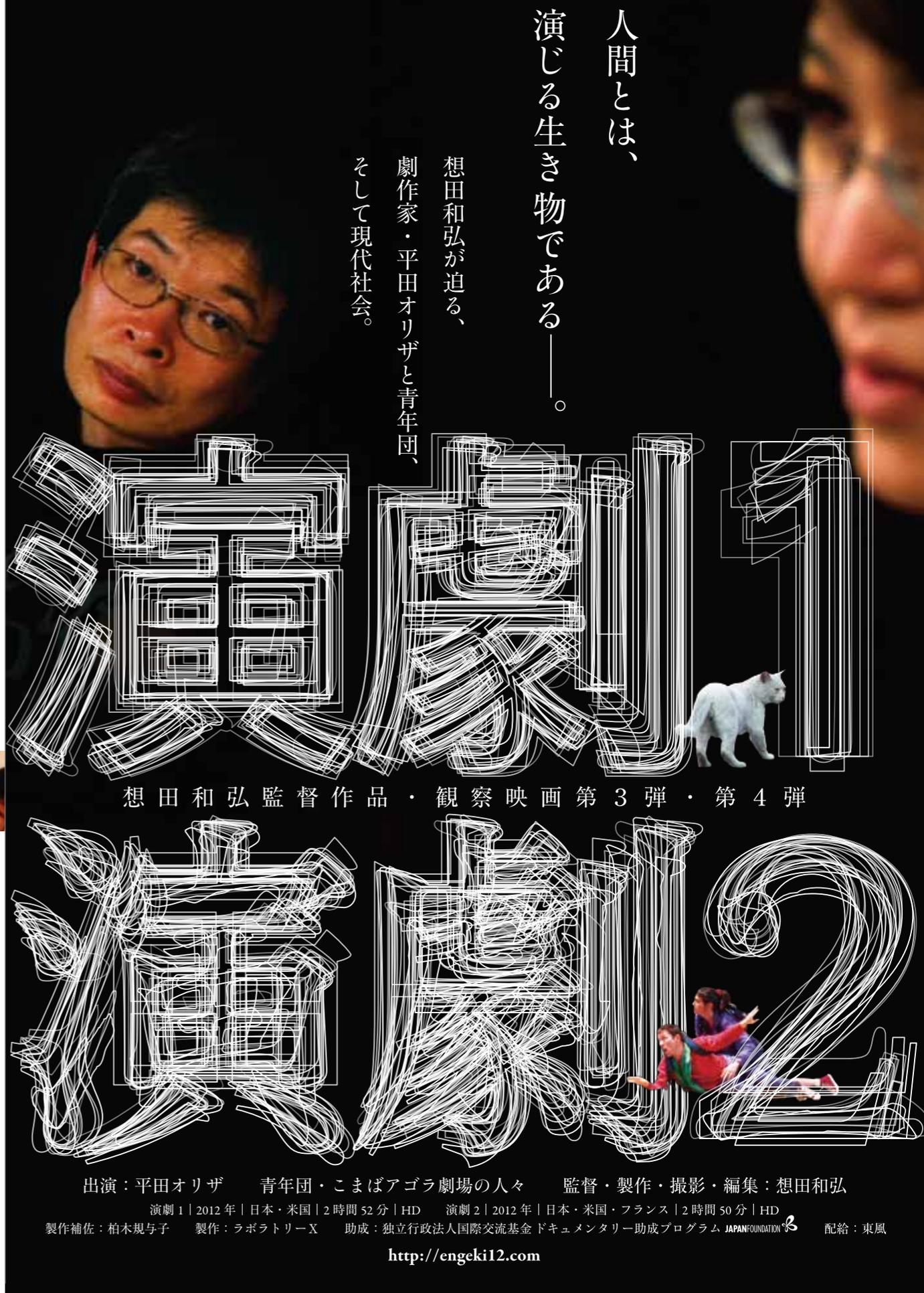
11月10日(土)～11月23日(金)まで、後半2週間＝
12:45～『演劇1』/16:00～『演劇2』/19:30～『演劇2』

『演劇1』『演劇2』特別鑑賞券 各1,500円、お得なセット前売券2,600円にて発売中
劇場窓口、都内主要プレイバック、チケットぴあ(Pコード464-114)にて販売中。当日一般 各1,800円/学生 各1,500円/シニア・会員 各1,000円

公開記念イベント連日開催

- 10月20日(土)16:00～『演劇2』上映後 想田和弘監督・初日舞台挨拶
- 10月21日(日)16:00～『演劇2』上映後 富田克也(映画監督『サウダージ』)×想田和弘監督
- 10月22日(月)16:00～『演劇2』上映後 平田オリザ×想田和弘監督
- 10月22日(月)19:30～『演劇1』上映後 山内健司(青年団)×想田和弘監督
- 10月23日(火)19:30～『演劇1』上映後 古舘寛治(青年団・サンプル)×想田和弘監督
- 10月24日(水)19:30～『演劇1』上映後 本広克行(演出/映画監督)×想田和弘監督
- 10月25日(木)19:30～『演劇1』上映後 深田晃司(映画監督『歓待』『東京人間喜劇』)×想田和弘監督
- 10月26日(金)19:30～『演劇1』上映後 松田弘子(青年団)×想田和弘監督

【シアター】
イメージフォーラム
【自由席・整理券制・定員入替制】
TEL.03-5766-0114 | www.imageforum.co.jp
渋谷駅より徒歩8分 宮益坂上がり、次の信号スターバックスコーヒーマスター右手入る



想田和弘監督作品・観察映画第3弾・第4弾

出演: 平田オリザ 青年団・こまばアゴラ劇場の人々 監督・製作・撮影・編集: 想田和弘

演劇1 | 2012年 | 日本・米国 | 2時間52分 | HD 演劇2 | 2012年 | 日本・米国・フランス | 2時間50分 | HD
製作補佐: 柏木規与子 製作: ラボラトリーX 助成: 独立行政法人国際交流基金 ドキュメンタリー助成プログラム JAPAN FOUNDATION 配給: 東風

<http://engeki12.com>

内田樹

——凱風館館長

たいへんに面白かった。

何がどう面白かったのか、手持ちの映画批評の用語ではうまく表現できない。そういう種類の経験だった。

この映画の「成功」（と言ってよいと思う）の理由は二つある。

一つは「観察映画」という独特のドキュメンタリーの方法を貫いた想田和弘監督のクリエイターとしての破格であり、

もう一つは素材に選ばれた平田オリザという世界的な戯曲家・演出家その人の破格である。

この二つの「破格」が出会うことで「ケミストリー」が生み出された。

二人がそれぞれのしかたで発信している、微細な歪音がぶつかりあい、周波数を増幅し、倍音をつくり出し、

ある種の「音楽」を作り出している。

岡田利規

——演劇作家／小説家／チェルフィッチュ主宰

演劇の上演を見るのは無論おもしろいけれど、本当は稽古もとてもおもしろい。

でも稽古は基本的に見世物ではないから、そのおもしろさをお客さんに渡すことがどうにも難しい。

僕はそれを残念だと思ってる。

『演劇1』『演劇2』では、演劇のリハーサルの現場が見られる。

演出で演技が変わることを目の当たりにできる。それを見てほしい。

もっともこの映画には、それ以外にもたくさんの見所がある。でも演劇の作り手として、

僕はまずその点を特に、みなさんに見てほしい。

ライムスター 宇多丸

——ラッパー／ラジオ・パーソナリティ

「高度に装われた自然さ」という点で、平田オリザ演劇と想田流ドキュメンタリーはよく似ている。

それだけに……「観察映画」がカメラを向ける対象として、実はこれ、最も手強い相手だったのでは？

そんな深読みもまた楽しい、あっと言う間の（ウソじゃないよ!）5時間42分。

佐々木敦

——批評家

「演劇」を過激かつ繊細にアップデートした平田オリザと青年団に、気鋭のドキュメンタリー映画作家は、いかに迫ったか？

克明に映し出される「演技と演出」の秘技、まさに「秘密は何もない」と言わんかのような、

徹底してリアルでぶっきらぼうな、天才劇作家／演出家の日々。

だが騙されてはならない。彼は「虚実」と「演じること」の専門家なのだから。

そしてそんなことは想田和弘監督も百も承知である。

それゆえ本作は平田オリザの「現代口語演劇」VS想田和弘「観察映画」の様相を帯びる。

この丁々発止の闘いが、実にスリリングなのだ。

西島大介

——漫画家

「演劇」の夢と現実。『1』の理想が反転する『2』こそ観てほしい。助成金、政治、教育、芸術。

5時間を超える物言わぬドキュメンタリーは、「情熱大陸」の30分では捨てられてしまう泥くさい現実をユーモアで描き出す。

平田オリザのいびきとともに！

平田オリザの世界。

芸術とは何か？

日本の演劇界を永久に変えた、平田芸術の理論と実践。その真髓にカメラが迫る!

日本を代表する劇作家で演出家の平田オリザと、彼が主宰する劇団・青年団。『演劇1』は、その創作現場にカメラを向け「平田オリザの世界」を徹底解剖する。台詞や動きがあまりに複雑かつ自然な平田作品を、即興の産物であると勘違いする観客もいる。しかし、台詞はすべて平田によって戯曲に書き込まれ、俳優の動きや仕草は細心の注意を払って練り上げられたものである。したがって、稽古場は修羅場と化す。現実世界を原寸大

で再現した、精密モデルのような超リアルな舞台の裏では、極めて不自然で徹底的な操作が行われているのだ。「**本当の自分**」などない。人間とは**“演じる生き物”**であり、あるのは**ベルソナ**だけだ」と平田は喝破する。想田和弘監督は、戯曲の執筆、稽古、照明、美術、劇団運営の実際など、あらゆる活動に密着し、その哲学や方法論、組織論を描き出す。同時に、人類誕生以来、太古の昔から続いてきた「演劇」という営みに挑むのだ。

松井周

——劇作家／俳優／サンプル主宰

想田さんはオリザさんを追いながら、「平田オリザ」という役をどこかで脱ぐんじゃないか、

そのオン／オフスイッチはどこにあるのかを探している。

偶然だろうが、寝息すらも逃さない方法に思わず吹き出してしまった。

その一方で、私たち劇団員と同じ視点を共有しているとも思った。

つまり、演じるならどこまでも演じ続けて欲しいと。と言っても盲信ではなく、コロスの視点で英雄を見守るという感覚。

「見る／見られる」の関係の中で、常に「演劇」は始まるというわけだ。

藤岡朝子

——山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局ディレクター

この映画を体験すると、玉ねぎの皮がはがれたり重なったりのような入れ子構造に身をゆだねながら、

ぐんぐん引き込まれるおもしろさが味わえます。演劇は魔法のように見る者を虜にしますが、

この映画も、没入する私たち観客の主観を一瞬にしてずらしたり、すり替えたりする、スリリングな旅。

想田和弘監督のあらたな境地は娯楽としても成功です。

富田克也

——映画監督『サウダージ』

『演劇』、いつもの想田作品らしいタイトルだが、これワイズマンだったら『青年団』としたのかもしれない。

乱暴にワイズマンを引き合いに出したが、両者の魅力には同じ秘密があると感じていたからだ。

自分だったら浅はかにも『平田オリザ』とタイトルしてしまいそうなこの作品は、

想田さんの明晰さをもってしても隠しきれない被写体への愛情によって観察され、

《平田オリザ＝演劇》その秘密が完璧なる構成によって

5時間42分一糸乱れず押し寄せ、オリザさんに対する渴望へと引き継がれてゆく。

本広克行

——演出／映画監督

「演じる」という嘘にカメラを向けても被写体の自意識から完全なドキュメントにはならないと思っていたけど、

収録技術などハードの進化と想田監督の観察映画の手法を用いてその壁を見事に乗越えるばかりではなく、

演劇入門として、演技と演出について考え、最終的にはオリザさん主演の喜劇映画を観ているかのようだった。

米屋尚子

——文化政策研究

想田監督のカメラは、たびたび、こまばアゴラ劇場の看板を映し出す。

ここに劇場がある。ここに演劇がある。

平田オリザという才能をもってしても、順風満帆とはいかない。

困難がたくさんあるからこそ惹かれ続ける人が後を絶たないのかもしれない。

どう受け止めるかは人それぞれだが、ここには「!」が満ち溢れている。

そんな「演劇」をじっくりと観察し続けた監督の粘り強さに、脱帽する。

平田オリザと世界。

演劇は21世紀を生き残れるのか？

演劇とお金、政治、教育、ロボット、国際化。そこから垣間見える現代社会!

演劇とは、コストも時間もかかる超アナログな芸術である。逃れがたく経済が付き纏う。青年団の事務所には『三文オペラ』の文句が掛けられている。「**まず食うこと** **それから道徳**」。しかし、不況と財政難で公的な芸術関連予算は縮小傾向に。この逆境に対する平田の戦略は、シンプルかつ遠大なものだった。「演劇が社会にとって必要不可欠である事」を世間に納得してもらおうというのだ。平田は文字通り東奔西走する。教育現場や

地方の演劇祭、果てはメンタルヘルスケア大会まで、その知識とノウハウを伝えていく。政治家への働きかけも積極的だ。他方で、海外進出やキラーコンテンツとしての「ロボット演劇」など、助成金に頼らない劇団経営を模索する。『演劇1』が「平田オリザの世界」ならば、『演劇2』は「**平田オリザと世界**」を見つめる。それは、演劇という芸術を通して、高度に資本主義化された現代社会を問い直す試みでもある。

演劇1

演劇2